

# 全国大会 名古屋で開幕



「頭の知識 体の知識」について、座談会で意見を交わす登壇者たち。3日、いずれも名古屋市の熱田区の名古屋国際会議場で(畑山巨撮影)

教育に新聞を活用する取り組みについて話し合う「第二十二回NIE全国大会名古屋大会」(日本新聞協会主催、愛知県NIE推進協議会、中日新聞社主管)が2日、名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で開幕した。大会スローガンは「新聞を開く 世界をひらく」。二日間の日程で、全国から教員や新聞関係者ら二千二百人が参加する。

(北村梨華、黒田桃花)

開会式では、日本新聞協会の白石興二郎会長が「誰でも容易に情報の発信や受信ができる今、学力に対する考え方が大きく変わっている。単に知識だけではなく得た情報をどのように活用するかが重要」とあいさつ。中日新聞社の大島宇一郎社長が「二十六の分科会では多面的な取り組みの情報共有を図りたい。実り多き大会にしてもらえたら」と歓迎した。

続いてノーベル物理学賞を受賞した名古屋大の天野浩教授が「世界を照らすLED未来を照らすことの大切さ」と題して講演。自身の研究体験や新聞との付き合い方を振り返り、「新聞に書かれている環境問題の記事が今の研究

# NIE 今深まる時

のヒントになっている。新聞記事は研究の羅針盤だ」と話し、大会に招待された高校生らに「特別な能力がなくても一心不乱に頑張れば人のためになり、未来の世界は自分たちでつくることができる」とメッセージを送った。

座談会には天野教授のほか、レスリング五輪メダリストの吉田沙保里さんや代表生徒の鈴木杏奈さん(愛知県時習館高三年)、津山克樹君(愛知教育大付属名古屋小五年)らが登壇。テーマは「頭の知識 体の知識」で、児童生徒がほかの登壇者にそれぞれの子どもの時代や新聞との関わりなどについて質問する形で意見が交わされた。

二日目の四日は、NIEの授業に取り組む愛知県内の教員らによる実践発表や公開授業などがある。

## 魅力リズムに乗せて

### 「しんぶんのうた」踊り披露

座談会の前には、振り付け師のラッキィ池田さんが登場し、岐阜県多治見市出身のシンガーソングライター佐藤梓さんが作詞作曲した「しんぶんのうた」のダンスを披露した。地元の子どもたちや、ダンス講師らでつくるペーパーガールズも一緒に踊った。佐藤さんは、インターネッ

トが普及し新聞離れが進む中で、新聞の良さが幅広く知られるように新聞販売店からの依頼を受けたそう。特に新聞に触れたことのない子どもたちに興味を持ってもらうためにリズムミカルでポップな曲に仕上げた。佐藤さん自身、新聞を読むことがあまりなかったため、新聞を読まない人の立場から見た新聞のイメージを盛り込んだという。

## 天野教授講演に真剣

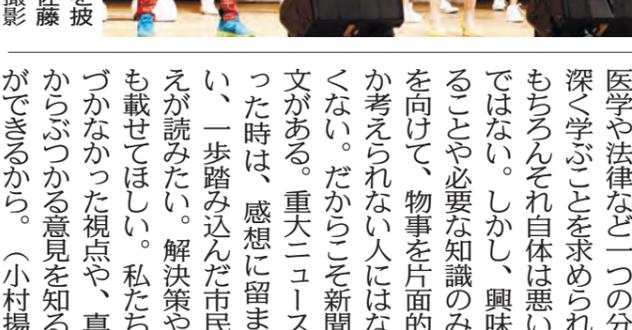


大会に招待された愛知県内の高校生たちは真剣なまなざしで天野教授の講演を聴いた。桜台高一年の高田大陸さんは「偉大な賞を受賞された

## 招待高校生インタビュー

方でも勉強は嫌だった過去がある」と知り、励まされた」と胸をなで下ろし、「人生において熱中することが大事だと思う」と満足そう。岡崎北高三年の加納真衣さんは「英語の長文問題を解くにも、天野先生のように新聞で世界の出来事を学ぶことが大事だと思った」と話した。

将来は医学の道を目指す大成高二年の山口陽大さんは「新聞を読んで政治や国際情勢について学び、考える力をつけたい」と語った。(坪井佑介、三輪亮太郎、竹村有紗)



「しんぶんのうた」のダンスを披露するラッキィ池田さんと佐藤梓さん、子どもたち(畑山巨撮影)



速報

発行所  
ホコホコNEWS編集部

NIE全国大会  
名古屋大会

News in Education

イベントホールの「世界の子ども新聞コーナー」を見学する来場者ら(畑山巨撮影)



## 子ども新聞で世界旅行

### 12の国・地域の紙面 紹介

イベントホールでは大会の二日間、世界十二の国と地域の「子ども新聞」が紹介されている。展示方法がユニーク。西端小学校(愛知県碧南市)の児童が手作りした直径二メートルの地球儀を取り囲むように、十二枚のパネルが並ぶ。子ども新聞を見ながら「世界一周の旅」ができる仕掛けだ。

現地で取材したのは、愛知県NIE推進協議会に加盟している新聞社や通信社の特派員たち。パネルには記者のコメントもある。酒井さんは「それぞれのお国柄を楽しんでほしい」と来場を呼びかけている。(鈴木悠斗)

## 斜知 SHACHI

学校の休み時間や電車に乗っている時、周りの同級生はスマホをいじってばかり。その理由は「自分が気になってる情報を手っ取り早く見られるから」。確かにネットニュースの最大のメリットだ。しかし同時に、自分の興味のない記事を全てシャットアウトし、それに関して無知になってしまふ危険性も大いにあります。新聞ならば、紙面を俯瞰的に眺めることによって、自分の興味に関わらずすべての種類のニュースが目に入る。記事の大小からその重要さを判断することもできる。中学生の時、新聞を読んで行動に移した経験がある。授業後、知的障害のある子に勉強を教える中学生の記事。支援と聞くと大人がするイメージだった。同世代が取り組んでいるのを知り、私も周りの人たちに何か貢献したいと考えて、老人ホームでのボランティア活動を始めた。お年寄りが何を求め、それにどう答えるかを常に考える力がついたように思う。現代社会で、私たちは医学や法律など一つの分野を深く学ぶことを求められる。もちろんそれ自体は悪いことではない。しかし、興味のあることや必要な知識のみに目を向けて、物事を片面的にしか考えられない人になりたくない。だからこそ新聞に注文がある。重大ニュースがあった時は、感想に留まらないうちに、一歩踏み込んだ市民の考えが読みたい。解決策や要望も載せてほしい。私たちが気づかなかつた視点や、真っ向からぶつかる意見を知ることが出来るから。(小村揚子)

ホコホコNEWS編集部員が名古屋の名所で「しんぶんのうた」踊ってみました!!

[URL] [https://youtu.be/V\\_NDeG\\_VbhU](https://youtu.be/V_NDeG_VbhU)



数々の振り付けを担当していることで有名なラッキィ池田さん。そんなラッキィさんは「しんぶんのうた」の振り付けをした。私たち編集部は6月に東京・西早稲田にあるスタジオでラッキィさん自身からダンスを習い、ダンスに込めた思いに迫った。

(ラッキィ池田さん取材班)

# ダンス踊ればみんなワクワク

## 振り付けをどう考えるか?

誰に向けて発信するか狙いを定めます。例えば「ようかい体操」なら、男の子が踊って女の子がそれを笑うようなイメージをしました。最終的には自分で踊ってみて、楽しいと感じたらそれは良いダンスということですね。

## 楽しいダンスにするコツは?

満足するまで作るということです。今回の「しんぶんのうた」も仕上げるまで第2稿、第3稿と作って大変でした。

## 授業で創作ダンスをする高校生にアドバイスを。

まずダンスの種類を知り、どんな振り付けにするか決めます。でも、カテゴリーにとらわれず、それを壊してもいいです。サビが一番盛り上がるよう工夫を凝らします。何よりもワクワクすることが大切です!

## 「しんぶんのうた」の踊りのポイントは何?

楽しく弾むように体を動かすことです。楽しそうに跳ねて踊る子どもの姿を想像しながら作りました。そこから周りの人にも踊りが伝わったらもっと嬉しいです。

## なぜダンサーではなく、振付師になったのか。

もともとダンサー志望でしたが、振付師の方が長く続けられるのではと23、4歳の頃に思うようになりました。振付師は人に何かを与える仕事なのが良いと思います。

## もし高校生だったら新聞のどの面に注目するか?

地域の情報などですね。新聞の隅の情報を大切にしたいです。それに、他人の知らない情報を自分が知っている優越感を味わいたいと思っています。

## 体育の授業にダンスが加わったことについて。

スポーツの一環としてリズムとともに体を鍛えることはすごくいいこと。情緒的なことを言えば、ヒップホップよりも創作ダンスの方が考える力が付くのでより望ましいと思います。

## 新聞とダンスって関係が薄そう...

新聞は言葉を伝えるツールでありダンスも元をたどれば動きで言葉表現しています。新聞とダンスはとても似ているんです。

## 子どものころは、どんな子?

荒川の土手で野球やバットを捕まえてたりして遊んでいました。近所は町工場が軒を連ねていたので、物作りも好きで、よくプラモデルなどを作っている子どもでした。振り付けは物をつくっているときの楽しさやできたときの喜びと同じですね。

## 高校生のときに悩んでいたことは。

3年生になると大学受験に向けて勉強するけれど、大学に行く目標とは、と考えるようになりました。英語は役立つけど、歴史や数学、古典は将来どう役に立つんだろうかって。

## 未来に向かって指さすポーズ♪

### Point!

新聞を印刷する場面を表している。素早く手を交互に突き出す。素早く出すところがポイント

### Point!

両手を真上に上げて横に開く。お相撲さんのように左右に四肢を踏む。大きく動いて新聞の大きさを表現する

### Point!

腕をくるくる、自転車やバイクの車輪が回っているような感じに

### Point!

「おじいさん～」の歌詞では写真撮影でピースをするように

### Point!

新聞を開く感じでペラペラと!腰を左右に振り、リズムカルに

### Point!

左右片足けんけん、新聞を読む感じでポップに元気よく跳ねる

取材/西尾七海、祖父江美祈、小野田菜緒、丹羽彩輝、山下ひな子  
撮影/西尾七海

この号外を作っているホコホコNEWS編集部は、N I E 全国大会のために中日新聞高校生スタッフの有志三十四人で結成した。普段のスタッフ活動では取材をしたり、社会問題について若者の視点から考えたりしている。編集部は、五月に中日新聞社の記者による記事の書き方、写真の撮り方などの講習会を受けることから始まった。受け持つ紙面によって、六グループに分かれ、ノベル物理学賞を受賞された名古屋大の天野浩教授、振付師のラッキィ池田さん、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんらを取材。高校生五百人に新聞に関するアンケートを取ったり、高校生八人で「新聞を読む理由」について座談会を開いたり、さまざま手段で情報収集をした。記事も自分たちで執筆し、試行錯誤しながら進めた。他にも号外の配布や取材基地の飾りつけを担当した遊軍、写真撮影を専門とする写真班の二班も活動している。編集部員の愛知県立習館高校二年生の市川慎太郎さんは「短い期間で大きな経験ができるので参加した。新聞を読まないことはもったいない」と話した。

(安田悠里子)

